

表題は敬愛する詩人Yが一九七二年に高村光太郎について考察した文章に由来する。ここで彼が論じた枠組みや思考の筋道に依りながら、山鬼文庫における福田尚代の作品について考えてみた。

*

今回展示されたうち、『泡とウズラ』、『残像・眠り箱』、『作文、詩読書感想文』、『窓』は技法として「消しゴムに彫刻」、「原稿用紙に彫刻」と表記されている。Yは原初の人類が岩や山を既に存在する世界とみなして、そこに線刻を残そうとしたのに対し、立体造型では全く新たに世界を創り出す行為であった点で、人類の表現として飛躍があったと考えた。これに照らせば、どんなに危うげに造形され、一見ランダムに配置されたとしても、これらの造型物がそれだけで成り立つ世界を確実に指示していると考えないわけにはいかない。原初の人類のように、一人の作者の行いすらその一部でしかない世界が成り立つていたとしてもである。

*

Yは近代以前の彫刻が器や仏像を裝飾するときにも、やはり浮彫の本質を離脱することはなかったと考えた。彼が「わが国の木彫造型は、いつも一方からの視線を予兆しているため、本質的には浮彫のヴァリエーションにしかすぎない」と述べるとき、確かに礼拝者の仏像に向かう関係が見事に言い当てられているように思える。これらと想像的な立体として、あるいは世界として質量をもつ彫刻との間の超え難い隔絶が高村たちの前に横たわっていたのは確かだろう。しかし、その後現在までに我々は例えば十九世紀日本にも卓越した立体造型としての生人形が登場していたことを知ることになったし、高村らの目指した近代彫刻なるものはそこに到達することが満足すべき目標であることに疑いを抱かざるを得ない二十世紀を生きていることも認めないわけにはいかない。一方で、十九世紀日本の造型が浮彫の世界しか知らなかったのではなく、きわめて写實的に人体を再現することに喜びを感じる感性を持ち得ていたことを認めておくべきなのだ。また、高村たちが闘わなければならなかったのはむしろ浮彫の規範のままでしかいられない作家を無理やり近代的な「美術」の枠組みにねじ込もうとした東京美術学校(高村光雲、竹内久一、石川光明)であり、それしか選ぶことのできなかった岡倉寛三の彫刻観だったのではない。あるいは、旭玉山に製作が依頼された人骨模型が教育標本以上の存在であることに眼を開かなかつた「美術」観では彫刻に近代をもたらしすることはできなかつたとすべきであろう。そうしたねじれた対抗軸のうえに立たされるほうが、困難が大きかつたはずだが、その構造を捉え損ねたところに高村の悲劇と彼らの限界をみるることができる。

これらの疑義は現在のわれわれの日本美術観が強く意識しているところである。それは個々の作品の再認識が進められた結果というよりは、非ヨーロッパ地域の造型の固有性に基づいて、作品をとらえる立場が拓かせたとすべきように思う。つまり、近代彫刻は表現の展開される時間軸の上で超克されると同時に、近代を受容ではなく共有する地域の拡張と認識の深まりのなかに相対化されることで、追尾や対抗の対象としてではなく、相互に転回する文化大系ととらえることができるようになったのだ。

*

原初に浮彫から立体像を作り始めたとき、それは自ずと触知によるほかはなかつたとYは論じている。かつても今も手が動いて創り出された彫刻を我々はわからないのかもしれないのだが、つくられた作品の結果はたどることができるとも言っている。だとすれば、我々は福田の夢想の世界があらさまに展開された『漂着物』からも、言葉の痕跡のうつろしか残さない『窓』からさえも、それがそこにある姿の語る理路を福田の世界として受け取ることはできる。また、それが作者の内にあつても定着せず、拡張し続けているのなら、観者もまた呼び覚まされつつ、穿ち会得しつづけるのが当然なのである。いわばこの共振、共鳴関係のなかに福田作品は介在し続けて、生きるのではないか。それは福田がとりあげるもうひとつのテーマである言葉でも同様で、発語だけでは意味伝達ではなく、人と人との了解の成立において初めて言葉は言葉たりえる。福田の作品においても、かように表現はものを介して伝達としてあり続けるのだ。

[作家プロフィール]

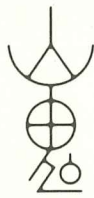
1967年 埼玉県浦和市生まれ、埼玉県在住
1992年 東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻修了
1994-2000年 アメリカ合衆国ワシントン州に居住

[主な展覧会]

2010年 「アーティスト・ファイル2010—現代の作家たち」
(国立新美術館)
2013年 「福田尚代 慈雨 百合 粒子」(小出由紀子事務所)
「秘密の湖」(ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション)
2014年 「MOT アニュアル2014 フラグメント」(東京都
現代美術館)
「MOT コレクション コンタクト」(東京都現代
美術館)
2015年 「Reflection: 返礼—榎倉康二へ」展(秋山画廊・
スペース 23°Cほか)
2016年 「福田尚代—言葉の在り処、その存在」(うらわ
美術館)

[著書]

『福田尚代作品集 2001-2013 慈雨百合粒子』(小出由
紀子事務所、2014年)
『ひかり埃のきみ 美術と回文』(平凡社、2016年)



福田尚代展「水枕 水枕」

2016年10月15日(土)―11月21日(月)

主催——山鬼文庫
協賛——株式会社 資生堂
協力——小出由紀子事務所

〔関連行事〕

作家は語る……10月16日(日) 午後1時より

福田尚代+森仁史(山鬼文庫代表、鷲田めるろ(金沢21世紀美術館キュレーター))

〔カタログ〕

2016年12月5日発行

編集——森仁史

発行——山鬼文庫

金沢市桜町五―二十七
<http://www.sankibunko.com/>

撮影——池田ひらく

デザイン——西岡勉

印刷——Krafy Design + Switch.riff



福田尚代展

「水枕
氷枕」

